



春

著者

発行者

発行所

一九八二年五月一日 印刷
一九八二年五月二〇日 発行

定価 一、二〇〇 円

竹西寛子

佐藤亮一

株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七二
電話 編集部 (03) 三六一五二
編集部 (03) 三六一五三
振替 東京 四一八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛
御送付下さい。送料小社負担にてお取替えい
たします。

目次

春

7

迎え火

27

夜の明けるまで

59

春過ぎて

87

市

107

降ってきた鳥

127

一丁目でしょう

147

湖

161

花の下

175

函装画

C. 11-LIBERALE DA VERONA-Venite, PARABOLA DEL FICO STERILE

〈オリオンプレス提供〉

春

春

毛糸の帽子と揃いの襟巻をした老人が、溪から吹き上げてくる風に鼻先を赤くしながらセメントと砂を捏ねている。鍬のようなものを持った手は節くれ立っていて、時々その甲で鼻のあたりを拭っているが、軀全体の動きは、どう見ても時間仕事に馴らされた者のそれではない。

溪の上は両側とも深い木立で、老人が作業をしているのは、その木立を庭の一部にした鉄柵の中である。車がやっと擦れ違うほどの道に面した柵は錆びて、もう何年ものあいだ塗料などとは関係なかったことを示しているが、蔓薔薇はよく絡んでいて、細くてもそれは生きている。刺の艶が何よりの証拠だ。

あと半月もすれば、年も暮れる。

溪に渡された木の橋に立つと、春の終りから秋の半ばにかけてはほんの一部しか見えない柵の中のブロック造りの家も、冬枯になると、無数の枝と幹の網目越しに、寄り合った塔のようなかたちを辿ることができる。

溪は、雨期がいい。

雪が解けて、草木が芽ぶきはじめるながめも悪くないが、若芽、若葉の時を過ぎ、木々の葉がいよいよしっかりと雨が来て、毎日小やみもなく降りつづき、水かさど濁りを増す流れとはうらはらに、深く磨き出されたような木立が溪を暗くしてしまう、それは、この溪のもっともはなやかな時かもしれない。

橋の上を、一日数回、郵便車が行く。溪を少し下ったところにある原っぱの入口にポストが立っているため、民家は密集してなくても、車は定まった時間にやって来るし、通勤時には、橋の上の人足もけっこう途切れないほどには続いている。昼間は、犬を連れた中年の女や、子供の手をひいた老婆が渡ることも珍しくない。

老人がセメントと砂を捏ねている箱のすぐ側には、河原砂の小さな山があり、それにどこからか運び込まれたらしいブロックが、それもせいぜい二、三十個、いくつかの束に分けて縄で縛ったままのものが、無造作に積まれている。

目下のところ、八角形の池でも拵えているふうなので多少とまどいもするが、老人の手がけているのは、狭いけれども明らかに建築中と思われるブロック造りの部屋で、地上高くのびているいく本もの鉄筋にしても、接ぎ目をモルタルで固めながらブロックを積み上げてゆく方法にしても、ことさら変っているわけではない。

ただ、普通の工事現場と違うのは、建築許可証や、請負っている工務店などの名前を記した天幕のようなものは通りからは見えないこと、一緒に作業している人も手伝う人もなく、材料らしいものも少ないこと、それに老人の服装が、庭仕事でもしている隠居風のそれだということなどである。

じっさい、老人の動きときたらおっとりしたもので、毎日必ず一定の時間をあてるわけでもなく、天気の良い日でなければ表に出なかったから、夏の終りに原っぱの近くで地鎮祭があり、振舞酒で祝宴の張られた翌日から、木材類を積んだトラックが幾台もやって来て、あっという間に棟上げが行なわれたのに比べると、道楽仕事かなにかに見えても仕方がない。

しかしこの部屋も、いつかはきつと住めるようになるだろうと思わせるのは、屋上によく洗濯物の干されている、あの塔のような建物が三つ、すでにその奥にあるせいだ。

下から数えられる窓の数通り、三階、四階、五階の造りだとも決められないが、どの建物もひと色には仕上っていなくて、あり合せの糸を繋いで編み上げたチョッキのように見える。上層部に行くほどブロックが新しい。

素木の枠に磨硝子をはめた両開きの窓も滅多に開かないので、どういう人々の住まいかは外からはよく分らないが、少しずつ材料を求めては層を重ねていったとしか見えない外

観は、恐らく今のようにして、あの建物も長年月かかってやっと出来上ったものだろうと想像させるのである。

原っぱの近くの新築工事は、秋風とともによく捗っているように見えた。こちらのほうは、雨の日にも雨の日の工事があり、曇り日にも曇り日の工事があった。電気工事の人とガス工事の人が、いっしょになって弁当をつかい、左官と大工が三時のお茶を注ぎ合った。この原っぱは、蓬と土筆の時期を過ぎると、それまで斑らに見えていた土が、湧き出すような青草におおわれ、それは日一日とせり上げてきて、いつのまにか波打つような草原に変ってしまう。強い陽射と草いきれのなかを蜻蛉が飛び交ってはどこかへ消え、入道雲の下で、突然蝗虫が跳び上がる。

やがて露草の藍が、自分の勢に疲れてしまったような丈高い雑草のあいだでひとしお芽える頃からようやく虫の声が涼しくなり、薄の穂を探しに來た人々が荒々しく虫をおどろかせて行くと、原っぱはまた少しづつ土の高さにもどりはじめる。そしてある朝霜が来る。籠をかかえて蓬や土筆を摘みに出るのは、大方、年輩の主婦か老婆であるが、夏草のしげみを利用するのは犬猫ばかりではない。すぐ近くには民家もないのに、荷物を積んだ自転車や、「空車」のタクシーなどがよく来て停る。

空模様とはかわりなく、いつでも黄色の雨靴をはいている小さな男の子の手をひいて、草履ばきの年寄った女が橋を渡るのは昼前のことが多い。例の地鎮祭が終ってからというもの、とねという名のこの女は、三日にあげず現場にやって来ては、通りすがりという恰好で男の子にあれこれ話しかけた。

「見てごらん。おうちがどんなふうにして建つのか。土台が決って、柱が建って、その次は屋根。屋根ができればもう安心。」

幼い子供にも、真剣な顔つきというものはある。しかしこの時、男の子の顔つきがそうなっていたのは、言われた言葉ではなく、電気鋸の唸りのせいであった。

鮑も、鋸も、電気仕掛けだなんて……

年寄は少しずつ不機嫌になってゆく。

鮑の刃を研ぐのも、昔は大工の大切な仕事のうちだった。この孫の父親に、小刀で鉛筆を削ることを教えたのはこのわたしだったのに……

孫のほうは、少しずつ電気鋸に近づこうとする。

とねは、繋いでいる手にちよつと力を入れて引いた。

「さあ、ママが待っているから、早くお買物をして来ましょ。」

同じくらいの力で男の子が抗った。とねは反射的に力を抜き、また思い改めて、今度は前よりもっと力をこめて引いたが、自分を見上げた孫の目に、一瞬ひるんだ。孫なのか、息子なのか区別のつかない目に見える。何年も前に、同じようなことがあったという気がする。

二人は歩き出した。

歩きながら、とねが、呟くように、

「一郎は、亡くなったおじいちゃんの顔を知らないけれど……」
と言いかけると、男の子はすぐさま、

「ぼく、しってるもん。パパがしゃしんをみせてくれたから。」
と打ち消した。

「ああ、そう。パパが一郎に？」

とねは、半ば拍子抜けしながらも半ばは満足して言いついだ。

「そのおじいちゃんね、田舎に建てたおうちを、ぼくに見せておきたかった。一郎のパパの生まれたおうちだから。」

「そのおうち、やけてなくなっただけでしょう？　くうしゅうで。」

「それもパパに聞いたの？」

「それはママ。ぼく、くうしゅうもしってる。ごほんでみた。テレビでもやってたよ。ひこうきが、ばくだんをいっぱいおとして、おうちがもえてしまうんでしよう?」

突然男の子は両手をひろげ、軀を左右に倒しながら走り出して、急降下爆撃の真似をする。橋の近くまで来ると、とねはきまってあの塔のような家を見上げた。

「ハイカラな洋館だねえ。」

「ハイカラってなあに? ヨーカンって、なんのこと? ねえ、おばあちゃん。」

とねは、またしくじったと割合に馴れた後悔をしながら、あれこれ時間をかけて言葉を探したが、そのうちに探すことに疲れた。蔓薔薇の絡んでいる柵の中で、その日も老人がひとり働いているのをそれとなく見届けると、腕にかけた買物籠を揺り上げるようにして橋を渡って行った。

原っぱの近くの家は、三月あまりのうちにほぼ竣工した。

鶯色のモルタルで塗り固めた塀にさらに凹凸をつけるため、作業服の男が、噴霧器のようなものを近づけてくるくる廻しながら吹付けをした。

別の二人は車庫の内装にあたり、もう一人は屋根の上でテレビのアンテナを取りつけた。その頃にはもう誰かが住みはじめていて、夜、炊事場についた灯りが、窓硝子に鍋や罐の